



Title	場面緘默の下位類型と背景要因：自閉的特性, コミュニケーション力, 不安
Author(s)	臼井, なづな
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/101892
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名(田井なづな)	
論文題名	場面緘默の下位類型と背景要因：自閉的特性、コミュニケーション力、不安
論文内容の要旨	
<p>【はじめに】場面緘默(Selective Mutism ; SM)は、DSM-5において「他の状況で話しているにもかかわらず、話すことが期待されている特定の社会的状況(例:学校)において、話すことが一貫してできない」と定義されている。DSM-5では不安症群に分類されているが、背景には不安の他にも多様な問題が存在する(Driessens,et al.,2020)。また、コミュニケーション症、自閉スペクトラム症(以下ASD)、知的障害などが併存するという報告(Kristensen,2000)もある。様々な背景要因をもち、様々な状態を示すSMについて、発症に影響する要因を知り、介入方法を選択するためには、下位類型化が役立つと考えられる(Cohen,et al.,2008)。</p> <p>そこで本研究では、論文①において下位類型化を行い、論文②において下位類型ごとにSM症状に影響する背景要因の検討を行った。</p> <p>論文①【目的】SM児の中で背景要因の異なる下位グループを見出そうとした。【方法】対象は、6歳から12歳の知的障害のないSM児22名(月齢平均114.4, SD21.76)と、その養育者であった。自閉的特性(SCQ)、コミュニケーション力(CC-2のGCC)、不安症状(SCAS)の尺度を用いてクラスター分析を実施した。【結果】3つの群に分類できると考えられた。3群は、月齢とSMの程度(SMQ-R)に関しては有意な差はみられなかった。クラスターIは、他の2群と比べてGCC得点が高かった。クラスターIIは、他の2群と比べてSCQ合計得点が高かった。クラスターIIIは、他の2群及びSCASマニュアルの不安症の基準に合致した臨床群よりもSCAS合計点が高かった。【考察】結果より、クラスターIを「相対的に高いコミュニケーション力を示す群」と命名した。SCQ合計得点とSCAS合計点の結果も併せて考えると、この群の対象児は目立った併存症のないSM児であると考えられた。また、クラスターIIを「相対的に高い自閉症特性を示す群」と命名した。この群は、ASDの併存が疑われた。そして、クラスターIIIを「高い不安症状を示す群」と命名した。</p> <p>論文②【目的】併存症のない群と、ASDが併存する可能性のある群について、SM症状に影響する背景要因を検討した。【方法】対象は、論文①で分類された3つの群のうち、「高い不安症状を示す群」3名を除く19名であった。「相対的に高いコミュニケーション力を示す群」が11名、「相対的に高い自閉的特性を示す群」が8名であった。説明変数としてSCQ合計得点、CC-2のGCC得点、SCAS合計点、目的変数としてSMQ-R合計点を投入し、パス解析を実施した。【結果】併存症のない群では、SCQ合計得点からSMQ-Rへのパスが有意であった($\beta=-.68, p < .001$)。ASDが併存する群では、GCCからSMQ-Rへのパスが有意であった($\beta=0.83, p < .05$)。【考察】併存症のない群の結果をそのまま解釈すると、自閉的特性が多いほどSM症状が重いことになる。しかし、この群のSCQ合計得点平均は3.27と低い。この群の対象児が該当したSCQの項目は、表情と身振り(非言語コミュニケーション)、自発性、同年齢の子どもとの関わりであった。よって、SCQによって自閉的特性と似た非言語的なSM症状が評価され、それが多いほど言語的なSM症状も重くなる可能性が示唆された。一方、ASDが併存する群は、GCC得点平均が55.25と低い。すなわち、コミュニケーション力が低い場合にはそれがSM症状に影響すると考えられた。</p> <p>【結語】様々な状態を示すSM児を「相対的に高いコミュニケーション力を示す群」「相対的に高い自閉的特性を示す群」「高い不安症状を示す群」の3つの下位グループに分類した。併存症のない「相対的に高いコミュニケーション力を示す群」とASDが併存する可能性がある「相対的に高い自閉的特性を示す群」について、背景要因の検討を行った。その結果、ASDが併存する群ではコミュニケーション力の低さがSM症状に影響する可能性が示唆された。しかし、SM研究は全体的に数少ない対象児を扱うため時に矛盾した結果が報告されるという指摘がある(Cleator,2015)。本研究も同じく対象児が少ない。したがって、本研究の結果を一般的なものとするためには、追って対象児を増やした研究が必要と思われる。</p>	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏名(臼井なづな)	
論文審査担当者	(職) 氏名 主査 教授 吉村 優子 副査 教授 毛利 育子 副査 教授 土屋 賢治

論文審査の結果の要旨

場面緘默(Selective Mutism ; SM)は、DSM-5において「他の状況で話しているにもかかわらず、話すことが期待されている特定の社会的状況(例:学校)において、話すことが一貫してできない」と定義されている。DSM-5では不安症群に分類されているが、背景には不安の他にも多様な問題が存在する(Driessens,et al.,2020)。また、コミュニケーション症、自閉スペクトラム症(以下ASD)、知的障害などが併存するという報告(Kristensen,2000)もある。様々な背景要因をもち、様々な状態を示すSMについて、発症に影響する要因を知り、介入方法を選択するためには、下位類型化が役立つと考えられる(Cohen,et al.,2008)。そこで臼井氏の研究では、論文①において下位類型化を行い、論文②において下位類型ごとにSM症状に影響する背景要因の検討を行った。

論文①【目的】SM児の中で背景要因の異なる下位グループを見出そうとした。【方法】対象は、6歳から12歳の知的障害のないSM児22名(月齢平均114.4, SD21.76)と、その養育者であった。自閉的特性(SCQ)、コミュニケーション力(CC-2のGCC)、不安症状(SCAS)の尺度を用いてクラスター分析を実施した。【結果】3つの群に分類できると考えられた。3群は、月齢とSMの程度(SMQ-R)に関しては有意な差はみられなかつた。クラスターIは、他の2群と比べてGCC得点が高かった。クラスターIIは、他の2群と比べてSCQ合計得点が高かった。クラスターIIIは、他の2群及びSCASマニュアルの不安症の基準に合致した臨床群よりもSCAS合計点が高かった。【考察】結果より、クラスターIを「相対的に高いコミュニケーション力を示す群」と命名した。SCQ合計得点とSCAS合計点の結果も併せて考えると、この群の対象児は目立った併存症のないSM児であると考えられた。また、クラスターIIを「相対的に高い自閉症特性を示す群」と命名した。この群は、ASDの併存が疑われた。そして、クラスターIIIを「高い不安症状を示す群」と命名した。

論文②【目的】併存症のない群と、ASDが併存する可能性のある群について、SM症状に影響する背景要因を検討した。【方法】対象は、論文①で分類された3つの群のうち、「高い不安症状を示す群」3名を除く19名であった。「相対的に高いコミュニケーション力を示す群」が11名、「相対的に高い自閉的特性を示す群」が8名であった。説明変数としてSCQ合計得点、CC-2のGCC得点、SCAS合計点、目的変数としてSMQ-R合計点を投入し、パス解析を実施した。【結果】併存症のない群では、SCQ合計得点からSMQ-Rへのパスが有意であった($\beta=-.68, p < .001$)。ASDが併存する群では、GCCからSMQ-Rへのパスが有意であった($\beta=0.83, p < .05$)。【考察】併存症のない群の結果をそのまま解釈すると、自閉的特性が多いほどSM症状が重いことになる。しかし、この群のSCQ合計得点平均は3.27と低い。この群の対象児が該当したSCQの項目は、表情と身振り(非言語コミュニケーション)、自発性、同年齢の子どもとの関わりであった。よって、SCQによって自閉的特性と似た非言語的なSM症状が評価され、それが多いほど言語的なSM症状も重くなる可能性が示唆された。一方、ASDが併存する群は、GCC得点平均が55.25と低い。すなわち、コミュニケーション力が低い場合にはそれがSM症状に影響すると考えられた。

論文①では、様々な状態を示すSM児を「相対的に高いコミュニケーション力を示す群」「相対的に高い自閉的特性を示す群」「高い不安症状を示す群」の3つの下位グループに分類した。論文②では、ASDが併存する群においてコミュニケーション力の低さがSM症状に影響する可能性が示唆された。アセスメントが困難であり、かつ介入に役立つ研究が極めて少ない選択性緘默(SM)児を対象として、統計的手法を用い背景要因を体系的かつ網羅的に整理した点は、学術的意義が非常に高く、評価に値する。本研究は、新たな知見を提供するとともに、今後の臨床的アプローチや支援策の発展に寄与するものであり、その独創性と応用可能性の観点からも評価される。したがって、本研究の成果は博士(小児発達学)の学位授与にふさわしいと判断した。